



「だれか助けて！だれか助けて！」と
叫ぶ声は、何十年たった今でも
決して忘れることはできません。

大阪大空襲に巻きこまれた当時15才の和田さんは、
目を疑う光景に立ちつくしました。

和田 治郎さん (当時15才)

学業よりも軍事が優先

わたしが小学校を卒業する12才のころには、すでに太平洋戦争は始まっていました。

当時は小学校を卒業した後、中学校に2年間通うことになっていたのですが、ほとんど勉強はできませんでした。「学徒勤労令」により中学生以上の方は全員、軍需工場などで働かなければならなかったのです。わたしは「放出」にある軍需工場へ働きに行きました。そこは軍隊の無線機をつくらしている工場でした。

少しでも勉強がしたいという思いから、定時制の学校に入学しました。定時制とは夜に授業を受けることができる制度です。昼間は工場で働き、17時になれば学校へ勉強に行くという生活を送っていました。

しかし、次第に戦争が激しくなりました。ある日軍隊の教官が工場へやってきて、「17時になったらどこへ行っているのか。」と言われたので、「定時制の学

校へ行っています。」と答えたら、教官が紙にハンコをおして「明日学校に持っていきなさい。」と言いました。学校へは行かず、お国のために働きますという証明書です。それからは定時制の学校にも通えず、毎日工場で残業していました。わたしの中学生時代はそれが当たり前でした。



「出征の様子」提供：岡倉三郎さん

いまだ忘れられない空襲の恐怖

戦況の悪化にともない、軍需工場も攻撃されるようになりました。半分仕事で半分避難というような状況で、毎日がそのくり返しでした。

当時わたしの家は大阪城の東側にありました。空襲警報が鳴り、電車が全て止まったため、通勤ができませんでした。仕方がないので家にいたら、家の周辺は空襲で次々にやられてしまいました。当時は舗装された道路もなく、土の道に10mぐらいの穴をほり、防空壕をつくっていました。

昭和20年3月の大阪大空襲は忘れられません。それまでは、5機程度のB29しか飛んでいなかったのに対して、その日は空が真っ暗になる程、B29で埋めつくされていました。

爆弾が落ちた衝撃により、防空壕が大きくゆれ、体が飛び上がりました。スポーツの試合で監督の胴上げなどがありますが、胴上げの状態から手をはなされて地面に落ちたぐらいの衝撃です。そのような爆弾を雨のごとく落とされました。防空壕の中は土煙が上がり、天井からも土が落下するので、中にいた人たちはみんな土まみれでした。

それから焼夷弾の攻撃が始まり、大多数が木造である大阪の民家は炎に包まれました。防空壕の中で衝撃にたえていた時に、不幸にも焼夷弾の1発が防空壕の天井をつき破り、わたしたちのいたところへ



「防空壕」提供：ピースおおさか

落ちてきました。それは不発で火はでませんでした、わたしのそばにいた小学生より小さいぐらいの女の子の肩に命中し、腕がボロりと取れました。その瞬間に、血がホースで飛ばしたかのようにふき出し、横にいた女の子のお母さんが自分の手でそこをおさえました。しかし血が止まらないので今度は自分の体にあて、力いっぱい抱きしめました。女の子の顔は見る見る真っ白になっていきました。泣いてはいませんでした。目を開けて、自然な表情でしたが、驚いていたのか失神していたのかもしれませんが。女の子のお母さんが「だれか助けて！だれか助けて！」と叫んでいた声は、何十年たった今でも決して忘れることはできません。わたしたちは何もできませんでした。怖くて、恐ろしくて、固まっていた。防空壕の中にいた人はだれも動くことができませんでした。

しばらくたつたころ、防空壕のフタが開き、警防団の人が防空壕の中を見て、「こんなところにいたら蒸し焼きになってしまう！早く防空壕から出て、広い道に逃げろ！」と言いました。わたしたちは火の手のない方へ走り出しましたが、女の子をかかえたお母さんだけは逆方向の火の海の中へ走って行きました。「そっちじゃない！こっちやで！」とみんなが叫びましたが、そのお母さんの姿は見えなくなりました。後から考えると、そのお母さんが走り去った方向には、小さな医院がありました。そこへ行くつもりだったのではないかと思います。その時のお母さんと女の子のことは後になって探し



「当時の家の中の模型」(左)「1トン爆弾」(右) 提供：ピースおおさか